

# 校歌に刻み込まれた歴史と伝統

渡 辺 裕

## 共同体歌としての校歌

音楽のもっている重要な役割のひとつに、共同体を形づくったり維持したりするというものがある。コンサート・ホールなどで、浮世の雑念を忘れて純粋に楽しむことは、もちろん音楽の醍醐味の一つだが、現実の社会の中で人々が声を揃えて歌うことで連帯を確かめ合い、アイデンティティ意識を強めてゆくこともまた、音楽の重要な機能である。もっぱらそのような目的で作られる歌は、しばしば「共同体歌（コミュニティ・ソング）」などと呼ばれるが、校歌はその典型的なものである。日本では、とりわけ昭和戦前期に多くの学校が次々と校歌を制定し、どの学校にも校歌があるという、世界的にも珍しい文化が形作られてきた。

狭い意味での校歌だけでなく、小学校で歌われる唱歌、女学生たちの歌う愛唱歌など、ふつうの音楽作品とはまた一味違う、さまざまな共同体歌のおりなす学校の音楽の世界は、日本人の共同体意識や心性を形作る上で大きな役割を果たしてきた。東洋英和女学校校歌は、校歌制定の動きが全国的に最も活発化した時期である1934年に、その先頭に立って多くの校歌、社歌、自治体歌などを作っていた北原白秋、山田耕筰という「黄金コンビ」が手がけた、この種の共同体歌の典型と言える作品であると同時に、それらの中でもとりわけ質の高いものの一つである。

## 共同体歌をめぐる「原典」問題

こうした珠玉のような作品であれば、原典をそのままの姿で残したいと考えるのは当然のことである。近年はとりわけ、「原典尊重」が叫ばれ、作曲家の自筆楽譜などの信頼できる資料をもとに校訂された「原典版」楽譜が重視される時代である。その意味では今回、山田の自筆楽譜の精査をふまえた原曲版の楽譜があらためて刊行されたことは、時宜にかなったことと言えるだろう。

他方で、共同体歌のような、人々に愛唱され、歌い継がれてきた曲の場合には、いささか厄介な問題もある。滝廉太郎の作曲した《荒城の月》

にある、原曲では半音下がりがだった「春高樓のはなのえん」の「え」の音が、全音下がりの形になって広まったり、ブラームスの《子守唄》のリズムの付点がとれてしまい単純化された形で広まったりするなど、作曲家の残した原典とは違った形で人口に膾炙しているケースが少なくないのである。

それらの場合、原曲より改変された形の方が自然で歌いやすいなど、もしそういう形に変えられていなければ、あれほど広く人々に愛されるようにはならなかったかもしれないと思わされることが多い。《荒城の月》の音の変更のケースは、作曲者の死後、山田耕筰が手を加えたものであることが知られているが、このように歌う人々の感覚に合わせた変更が意識的に行われることも少なくない。こうしたケースでは、改変のもたらした効果の重みや広がりを見ると、原曲を尊重して元に戻すのが良いと、一概に決めるわけにはいなくなってくる。

今回のケースでも、編曲者の富岡正男が行ったへ長調への移調は、音が高すぎるための歌いにくさを解消するという理由であろうし、その他の変更も、最小限の変更でさらなる輝きを加えることに成功したもので、その意味では、共同体歌によくある事例のひとつであると言って良い。山田自身、率先して滝廉太郎の《荒城の月》の改変に関わっていることから窺えるように、共同体歌特有のこのような問題をよく理解していた。山田はベルリンに留学して西洋の最先端の現代音楽を取り込むような仕事の一方で、民衆が声を揃えて皆で歌えるような「国民音楽」の樹立を自らの重要な使命と考えていた。あれほど多くの校歌を手がけたのもまた、そういう使命感ゆえのことであり、富岡の加えた改変について、山田が単に了解したという以上の積極的な賛意を示したとしても決して不思議ではない。

## 複数の「正しい歌い方」

共同体歌のこうした特殊事情に限らず、最近の音楽研究では、楽譜や演奏法の「正しさ」に関わる考え方全体が大きく変化してきている。

音楽というものが、楽譜に書かれた時点で完成するのではなく、さまざまな「現場」でさまざまな人が関わってはじめて実際に音になる「生もの」である以上、楽譜はプランの一部にすぎないとも言える。作曲者自身、自分が現場に立って演奏する機会があれば、演奏者の技量、ホールの音響等々、さまざまな要素を考慮して改変を加えたであろうことは想像に難くない。そういうことから、最近の楽譜校訂は、唯一の正しい「原典」を固定するというよりは、そうした多様な可能性をできる限り勘案するような方向に向かってきている。

特に共同体歌の場合、多様な伝承の場があり、それぞれに応じた歌い方の「伝統」が形作られていることも多い。有名な北大寮歌《都ぞ弥生》は、寮歌集編纂の過程で何度も作曲者に問い合わせるなど綿密な楽譜の校訂が行われてきた一方で、入学式できいた歌い方と、その当時寮で行われていた、「一息二文字」などと呼ばれるおそろしくゆっくりした歌い方があまりに異なるので新入生が仰天したといった一口話を生

み出したりもしてきた。しかしその多様なあり方は、その曲が形作ってきた歴史や伝統の深みの現れと考えるべきであって、無理にどれか一つの「正しい」ものに統一することは、そうした深みや厚みを失わせることにもなりかねない。その意味では今回、東洋英和女学院校歌の楽譜やCDが「原曲版」と「編曲版」とを並置する形で編纂されたことは、まことに理にかなった措置と思われる。それは、この校歌が多くの人々の手で守り育てられてきた誇るべき歴史であると同時に、その上に立って、将来さらに第三、第四の新しいあり方が生み出されてゆく、そんな可能性の広がりを感じさせてくれるのである。

### プロフィール

渡辺 裕（わたなべ ひろし）

東京大学大学院人文社会系研究科教授（美学芸術学、文化資源学）。専門は聴覚文化論、音楽社会史。著書に『聴衆の誕生』（中公文庫）、『日本文化モダン・ラブソディ』（春秋社）、『歌う国民』（中公新書）など。



上：初版楽譜 1ページ 山田耕筰サイン入り

右上：「東洋英和女学院校歌」 創立75周年記念レコード（1959年）

右中：「東洋英和女学院校歌」 創立100周年記念レコード（1984年）

右下：「楓よ楓の園」 CD（2016年3月）

